

グループワークをとおして学ぶ古典文学

——『基礎国語（基礎古文）』の授業展開を中心に——

由井 恭子

1 はじめに

平成27年度春学期、I類科目『基礎国語（基礎古文）』を担当する機会を得た。『大正大学履修要項2015』によると、I類科目とは、「これからの大学教育の基礎、さらに社会人として生きていく力を養うことが目的で構成された科目」であり、すべての学年、すべての学科の学生が受講可能な授業である。古典文学の授業は一般的に講義型が多く見受けられるが、グループワークをとおして古典文学を学ぶ授業展開を試みたので、報告しておきたい。

2 基礎国語（基礎古文）の授業概要

平成27年度春学期『基礎国語（基礎古文）』の授業は、水曜日3限目、可動式座席が配置されている251教室で開講された。受講者数は、1年生23人、2年生19人、3年生9人、4年生3人、合計54人であった。受講生の学科内訳は、人間学部臨床心理学科6人、人間環境学科5人、アーバン福祉学科・社会福祉学科2人、教育人間学科2人、人間科学科1人、文学部歴史学科12人、日本文学科8人、人文学科5人、表現学部表現文化学科13人であった。

シラバスには授業の到達目標を3点掲げた。①古典文学読解に必要な基礎的知識（古典文法・単語）を身につけることができる。②古典文学を読解する力を養うことができる。③古典文学の楽しみ方、奥深さを知ることができ

る。これらの到達目標を意識しながら、授業を展開した。

授業は基本的に、出席確認、古典文法の小テスト、次回古典文法小テスト範囲の解説、グループワークを取り入れながら古典の基礎事項調査、古典読解の構成で実施した。古典文法小テストは、動詞2回、形容詞・形容動詞1回、助動詞4回、助詞・副詞1回、敬語1回実施した。テスト範囲は、初回授業でテキストを配布し、各回の試験範囲をあらかじめ提示した。古典の基礎事項調査は、各回テーマとなる課題を教員が用意し、グループごとに異なる調査課題を与えた。たとえば、『源氏物語』の回では、「紫式部」「藤原道長と中宮彰子」「『源氏物語』の成立」「光源氏」「頭中将」「桐壺更衣」「藤壺」「紫の上」「明石の上」「夕顔」「六条御息所」「玉蔓」などのように、それぞれ課題を与え、グループごとに授業中に調査し、その内容をグループ代表者がクラスに報告した。読解テキストは、『方丈記』『無名抄』『源氏物語』『平家物語』『徒然草』の中から選定した。

3 履修者の受講動機と授業形態の変更

第2章で確認したように、本授業は1～4年生の様々な学科コースの学生の登録があったため、初回授業において受講動機の調査を実施した。その結果、受講動機は、「古典文学に興味があるため」「日本文学に興味がある」などのように、元々文学に興味があり、授業をとおして教養を身につけたいとするものや、「国語の教員免許取得に役立つから」「就職活動の筆記試験に必要なだから」「公務員試験対策として」のように学生自身の進路に関わるもの、また、「単位取得のため」などのように実にさまざまなものであることが判明した。

本授業は、昨年度までも開講されていたが、履修者は人文学科日本語日本文学コースの学生や、表現文化学科の国語の教員免許取得を目指す学生が大半であったため、学期前はこれらの学生を対象とした授業構築を考えていた。しかし、本年度の受講生は前年度までの傾向と大きく異なったため、様々な専攻をもつ学生同士が学び合えるように、グループワークを採用した授業形態に変更することとした。

グループワークの実践については、2015年3月に教育開発推進センターFDにおいて、学びの共同体を実践している東京大学附属中学校教諭・江頭双美子氏の実践報告を拝聴する機会があり、参考にさせていただいた¹⁾。

4 グループワークの方法

4-1 学生の学力差

まず、履修者の古典読解能力であるが、実力にはかなりの差があった。古典読解問題において、日本文学専攻の学生や、国語の教員免許を目指す学生、大学受験を終えたばかりの1年生は、率先して文章を現代語訳し、解答する傾向にあった。これらの学生は、もちろん古典文法の知識はある程度あり、基本的事項を確認するために本講座を受講しており、古典文法の小テストの得点も高い傾向にあった。しかし、元々古典が苦手であった学生や、大学に入学してから古典文学にふれる機会が全くなかった学生も履修しており、古典文法や読解問題に手こずっている様子も見受けられた。以上のように、授業開始時において、古典に対する基礎能力にかなり大きな差がある状態であった。

4-2 グループ作成

このような状況の中、第2回授業時に4人グループを13グループ作成した。グループ分けはカードで実施したが、各グループに、古典を得意とする学生が1人～2人見受けられたので、授業のたびにグループ分けはせず、最後まで同じグループで実施した。

グループワークを授業に取り入れる場合、グループ分けの頻度は教員が考えるべき重要な項目であろう。本授業では、学期途中でのグループ替えはしなかった。学期をとおして、同じグループで学習するメリットはいくつかあげられるであろう。まず、I類科目の特性として、学年も専攻も全く異なる学生が50人以上集まっているため、授業開始時点では、学科授業とは異なり、学生同士の連帯感はほとんどないといって良い。そのため、毎週グループ分

けを実施すると、授業の度に見知らぬ学生との人間関係を構築するところから始めなくてはならない。グループメンバーと、すぐ打ち解けられる者もいれば、時間をかけて打ち解けていく者もいるため、短期間でのグループ変更は、学生の心理的負担に繋がる可能性があるかと判断した。また、同グループにおいて、人間関係を構築していくにつれ、授業内でお互いに意見交換し合う関係ができ、授業の終盤にはかなり連帯感を感じられるグループが増加してきた。これらは、学期をとおしてのグループワークの成果であると考えられる。

4-3 協働学習の教室座席

次に、教室の座席であるが、協働学習においては講義の際は座席はコの字に配置し（図1参照）、グループ学習の際には机を移動（図2参照）することが多いようである²⁾。

本授業では、試験などを除いて基本的には図2の状態で行った。学生自身も席の移動に不慣れなため、図1から図2へ移動するのに、非常に時間がかかったことと、学生数に対して教室が狭く、非常に動きにくい環境であったこともあり、座席移動は最低限にとどめた。

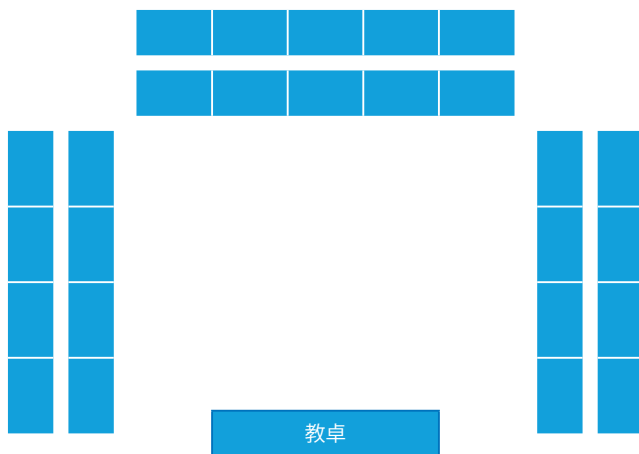


図1 コの字の教室座席

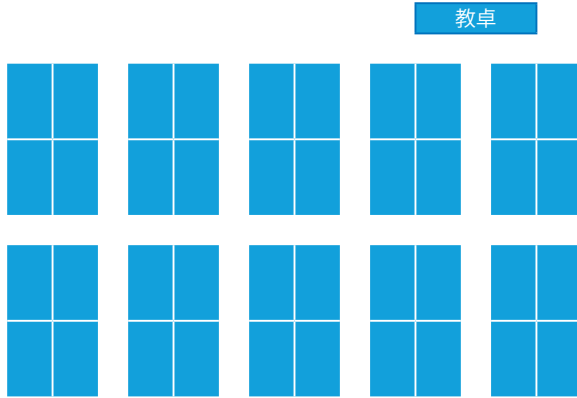


図2 グループワークを実施した際の座席配置

4-4 授業の実践方法

古典の講義型授業においては、一般的に、まず学生に古典文法や読解の練習問題を解かせる。その解答を学生を指名し答えさせ、教員が解説を加えながら解答に導く場合が多い。グループワークを取り入れた本授業では、教員がポイントを解説し、学生に問題を解かせた後、グループで答え合わせをさせ、解答の導き方を学生に考えさせ、最後に教員と答え合わせをした。また、グループメンバー内で解答が異なる場合、その原因を辞書や参考書を使用して調査する時間も設けた。ここでは、グループワークの前段階における、学生1人1人が問題に向き合う時間、調査する時間を特に大切にし、学生自身が分からない箇所を、しっかり認識し、グループメンバーや教員に質問できる雰囲気を作るようにした。

また、はっきりと解答が分かる文法問題や読解問題だけではなく、物語や随筆の社会的背景など、比較的抽象的な事項に関しても、調査し考える時間も作った³⁾。たとえば、本授業では、鴨長明の『方丈記』と『無名抄』を取りあげたが、『方丈記』にあらわれる無常観や『無名抄』の狂言綺語観は時代や作者である長明とどのような関係があるか考えさせた。これらの問いは、意外にも古典文法でつまづいている学生にも受け入れられやすく、基本的な問題が苦手な学生もしっかりと考察していたのが印象的であった。

5 学生のアンケート結果

グループワークを取り入れた「基礎古文」の授業を担当したのは今年が初めてであったため、大学アンケートとは別に、独自にアンケートを作成し第15回目の授業で実施した。履修者54人のうち、アンケートに答えた学生は39人であった。

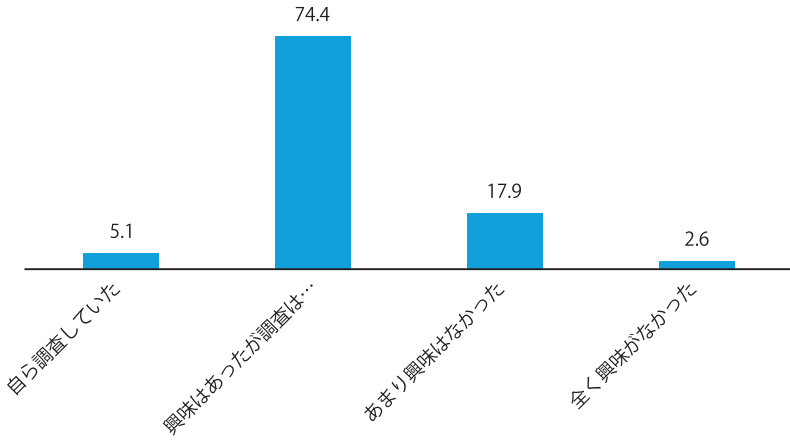
まず、問1「春学期授業が始まる前に古典文学にどれくらい興味があったか」という質問にたいして、「興味があり、自ら調査していた」と答えたのは5.1%。「興味はあったが、調査はしていなかった」と答えたのが74.4%であった。受講者の79.6%は元々何らかの興味を抱き受講してきたことになる。反対に、「あまり興味がない」と答えたのは、17.9%。「まったく興味がなかった」としたのが、2.6%であった。約20%の学生は、興味がないまま、たぶん必要に迫られて「基礎古文」の授業を受講したのであろう。

次に、問2「春学期中に古典文学にまつわる本を読んだか」という質問に対して、「10冊以上読んだ」としたのは5.1%、「5～9冊読んだ」としたのは2.6%、「1～4冊読んだ」としたものは41%、「読んでいない」としたのは51.3%であった。これは受講者の専攻にも関わるものであるが、何冊かは別にして、古典にまつわる本を読んだ学生が合計48.7%、読んでいない学生は51.3%ということになる。

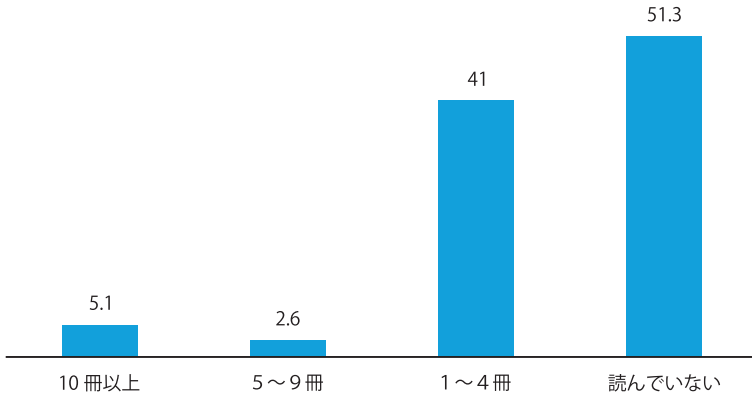
それに対し、問3「古典文学にまつわる本を読んできたいか」という質問をしたところ、「読んできたい」としたのが25.6%、「少し読んできたい」としたのが61.5%であり、古典に関する読書に前向きな学生が87.1%いることが分かる。

これら3点の質問から、なんらかの興味をもって授業を履修した学生が約79.6%であったのに対し、実際に本を読むという行動にうつしたのは、48.7%にとどまったことになる。しかし、「古典に関する本を読んできたい、少し読んできたい」学生は87.1%であった。実際には行動には移せていないが、古典文学に関しての関心の高さがうかがえる⁴⁾。

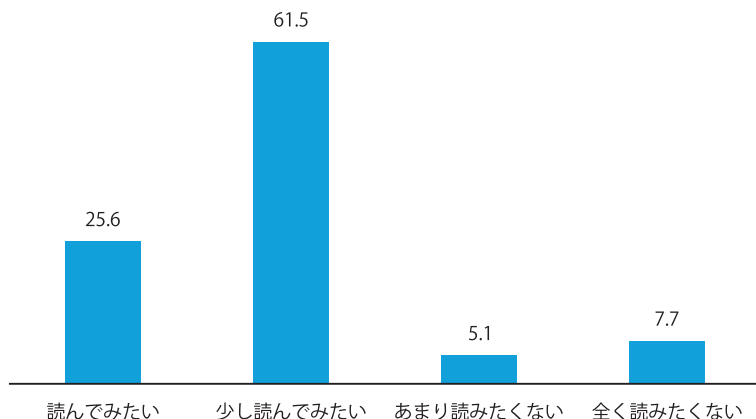
■ 問1 古典文学にどれくらい興味があったか？



■ 問2 春学期中に古典文学にまつわる本を読んだか？



■ 問3 古典文学にまつわる本を読みたいか？



6 今後の課題

本授業は、「基礎古文」という限られた授業内容にもかかわらず、他分野の多くの学生が受講していることが特色であった。一般的な古典文学の魅力を講義するだけでは、古典の基礎学力を養成することは難しく、ある程度の演習問題は必要と思われる。その際に、様々な学生が学び合えるよう、協働学習を取り入れた。第5章のアンケート結果によると、春学期の最後には「古典に関する本を読みたい、少し読みたい」と答えた学生は87.1%いたので、一定程度の学生は古典文学に興味を持ったと考えられる。しかし、依然として約13%の学生は古典に関する興味を持つことのないまま、春学期を終了したことになる。次年度以降は、これらの学生にも興味を持たせるよう様々な工夫をしていきたい。

今年度は時間の関係で、視覚資料や映像資料は最低限にとどめたが、音や視覚に訴える資料は今後さらに取り入れていかなければならないだろう。授業内容としては、古文の基礎的な事項だけでなく、大学の授業にふさわしい教養的内容にも踏み込んでいくことにより、学生が興味をもつ可能性も高い。

また、シラバスにも授業がグループワークを重視するものであることを、

よりはっきりと明記する必要があるだろう。「基礎古文」という授業名から、高校時代に受けた古典の授業の延長であると考えた学生も多いようであり、授業の前半はグループワークにとまどっている学生も見受けられた。現在、I類科目「技法A(論理力)」を担当しているが、シラバスに「毎回グループワークを実施する」「ディスカッションを重視する」「自らがプレゼンテーションをする」と明記し、授業にのぞんだところ、学生自身も授業初回から、グループワークやディスカッションに対して抵抗を示すことなく、積極的に参加している。

また、今年度は、時間の関係で、グループワークの内容報告を教員に提出させる機会が少なかった。次年度以降は、ループリックを使用して、グループワークに教員が求めていることを明示し、それに対し、どのように課題に取り組んだか学生が振り返る時間を取っていく必要を感じる。

7 結びにかえて

現在、小学校、中学校、高等学校、大学と様々な場面で、協働学習が取り入れられている。本授業では、その取り組みの一つとして、大学における「基礎国語(基礎古文)」の授業で実践を試みた。学年や専攻も多様な学生達に「基礎古文」の授業を実施する意義は、古典の基礎知識を養成し、自力で古典文学を読解する力をつけること、それから古典文学に対する興味を引き出すことであろう。そのために、グループワークをとおし協働学習を試みた。アンケート結果から、ある一定程度の学生(約87%)の興味を引き出したと考えられる。今後は依然興味を示さなかった学生層にも、何か心に残るような授業展開を考えていきたい。そのためには、視聴覚を利用した教材をもう少し増やすことや、グループワークの問いかけ方法(より難易度の高い課題を出す、基礎でつまづいている学生も興味を示す)にも工夫をしていきたい。シラバスの記入方法にも注意し、授業に抵抗なく入ってこられるように誘導していきたい。

註

- 1) グループワークを取り入れた授業に関しては、2015年3月に実施した大正大学教育開発推進センターFDにおいて、東京大学教育学部附属中等教育学校の江頭双美子氏（国語科担当）にご教示いただいた内容を参考にした。その他に佐藤学氏『学校を改革する』岩波ブックレット842（2012年）なども参考にした。
- 2) 前掲1)の研修、佐藤学氏『学校を改革する』岩波ブックレット842（2012年）による。
- 3) 佐藤学氏『学校を改革する』岩波ブックレット842（2012年）「第4章共同的学びによる授業改革 〈基礎〉から〈発展〉へ学びが進むとは限らない」において、〈共有の課題〉と〈ジャンプの課題〉両方の重要性が指摘されている。
- 4) アンケートのグラフ化は、大正大学総合佛教研究所研究員大橋雅人氏の協力を得て作成した。